

不登校支援ブリーフィング: デコボコを認める教育と「親育て」の視点

本ドキュメントは、デジタルハリウッド大学名誉教授である渡辺パコ氏へのインタビューに基づき、不登校問題の本質、日本社会の人間観、および歴史的・民俗学的背景から見た教育の在り方を網羅的にまとめたものである。

1. エグゼクティブ・サマリー

不登校支援において最も重要な視点は、人間を「均一な円形(丸)」に矯正しようとする歪んだ人間観を脱却し、個々の「デコボコ(不規則な個性)」をありのままに受け入れることにある。渡辺氏は、不登校そのものよりも、当事者が社会から見えなくなる「孤立」を最大の懸念事項として挙げている。また、不登校は子供だけの問題ではなく、親が大人として成長する「親育て(おやそだて)」の機会でもある。支援の現場においては、子供への直接的なアプローチと並行して、親の認識変容と、地域社会における「斜めの関係(親・教師以外の大人との繋がり)」の再構築が不可欠であると結論付けられる。

2. 核心的テーマ: デコボコな人間観の肯定

2.1 「丸」を目指す社会の弊害

日本社会には、人間の出っ張っている部分を削り、凹んでいる部分(弱点)を無理に埋めて「丸くしようとする傾向がある。

- 歪んだ人間観: 「デコボコ(個性や欠点)」を異常と見なす側こそが、実は自身のデコボコが見えておらず、人間観が歪んでいる。
- 相互補完の重要性: 本来の人間社会は、個々のデコボコを組み合わせ、噛み合わせることで機能するものである。

2.2 多様性受容の現状

渡辺氏は、日本の若者を中心にLGBTQなどの多様性受容が進んでいることを指摘し、社会全体がゆっくりとではあるが改善の方向へ進んでいるとの見解を示している。

- 国際的比較: 欧米で見られる多様性への反動(反DEI)に対し、日本は比較的自然な形で多様性を受け入れる土壌が形成されつつある。
- 変化の抑止: 古い価値観(「学校へ行くのが絶対」など)に逆戻りさせないように、社会全体で新しい価値観を維持・推進していく必要がある。

3. 「親育て」としての不登校

不登校は、親が大人として、また支援者として試される「チャンス」とであると定義される。

3.1 謝罪から感謝への転換

多くの親は、子供が学校へ行かないことを「申し訳ない」とネガティブに捉えるが、これは子供の尊厳を傷つける行為になり得る。

- 教師への対応: 欠席の連絡や家庭訪問に対し「すみません(謝罪)」ではなく「気に掛けてくれてありがとう(感謝)」と伝えるべきである。
- 子供の代弁者: 親は周囲の大人に迎合するのではなく、子供の現状を客観的に理解し、ポジティブな言葉で説明できる最大の支援者でなければならない。

3.2 親子並走の成長

「子育ては親育て」であり、子供の年齢と同じだけ、親としての経験値も積まれる。

- パラレルな経験：子供が不登校である期間、親もまた「不登校児の親」としての時間を過ごしている。この時間を共有し、お互いの思いを整理・言語化することが、親子の距離を縮める鍵となる。
- 自尊心の維持：周囲が子供の「ありのまま」を肯定することで、子供は自己肯定感(自尊心)を維持したまま成長できる。

4. 歴史的・民俗学的視点から見る教育

現代の画一的な教育制度は、日本の伝統的な教育の在り方から乖離している。

4.1 寺子屋に見る個別最適化

江戸時代の教育基盤であった「寺子屋」は、現代の教育が目指すべきヒントを内包している。| 項目 | 江戸時代(寺子屋) | 明治以降の近代教育 || :--- | :--- | :--- || 形態 | 小規模(15名程度)、異年齢混在 | 大規模、同年齢集団 || 指導 | 師匠による完全な個別対応 | 教科書による一斉授業 || 目的 | 個々の適性に応じた実学・識字 | 工場労働者・軍人の大量生産 || 不登校 | 概念自体がほぼ存在しない | 社会的問題として顕在化 |

4.2 「斜めの関係」の喪失

かつての日本農村部には、親や教師以外の大人と接する仕組み(若衆宿、娘宿など)が存在した。

- 集落の機能：親ではない年長者が指導役となり、遊びや作業を通じて子供の特性(得意・不得意)を見極めていた。
- 現代の課題：核家族化と地縁の希薄化により、この「斜めの関係」が消失した。現代においては、フリースクールやスポーツクラブなどを通じて、意図的にこの関係を作り出す必要がある。

5. 支援者および教育現場への提言

5.1 孤立(座敷牢状態)の回避

不登校において最も回避すべきは、子供や家庭が社会から隠され、存在しないことにされてしまう「座敷わらし」のような孤立状態である。

- 言語化の発信：隠し事にせず、今どのような状態で、何をしているのかを言葉にして外へ出していくことが重要である。

5.2 学校教師に求められる新たな役割

子供の数が減少する現代において、教師は単なる「学級の王様」から脱却し、広範な社会関係の結節点となるべきである。

- 環境の把握：学校内だけでなく、塾、学童、家庭、フリースクールなど、子供を取り巻く環境全体を把握する視点を持つ。
- 外部との連携：ソーシャルワーカー、フリースクール、支援コミュニティ(ハートスクール等)との積極的な連携を図る。
- 自己理解：教師自身のキャラクターや特性を理解し、一人の人間として子供や親と向き合う姿勢が求められる。

6. 重要引用句(インタビューより抜粋)

引用内容,コンテキスト

「人間はもともとデコボコなもの。日本社会はそれを丸くしようとするが、出っ張りとへこみをうまく噛み合わせるのが本来の人間関係。」,理想的な社会・人間観について

「子育ては親育て。子供が1歳の誕生日は、親も親になって1歳の誕生日。」,親子の成長の同時性について

「誰かを『いないこと』にしちゃいけない。隠し事にせず、言葉にして出していくことが一番大事。」,孤立化する不登校への警鐘

「不登校は親にとってのチャンス。滅多にない貴重な時間を子供が用意してくれたと思えば、接し方が変わる。」,不登校の捉え直しについて

「明治以降、日本人を企画化して大量生産する教育に変えてしまったが、今はもうそういう時代ではない。」,教育制度の歴史的弊害について